

## オオハシシギとカラフトアオアシシギの渡来

石 江 馨・石 江 進

### 1. オオハシシギ

鶴見川の河口に構築中の大黒埠頭は、埋立工事の進行に伴い、その一部が干潟状となり、春秋に我が国を通過してゆくシギ・チドリ類の一時的な休息地となった。

1977年には雨水によると思われる水溜りもいくつか生じ、セイタカシギ、アオアシシギ等、淡水性のシギ類の着く所となった。1978年10月15日に、こうした水溜りの一つに、オオハシシギ (*Limnodromus scolopaceus*) が1羽渡来した。本種はアラスカ西部とシベリア東部で繁殖し、日本へはごく稀に旅鳥または冬鳥として渡来する。県下では1874年3月13日に採集された記録があるのみである。

名前の由来となった長い嘴とずんぐりした形態はジシギ類を彷彿させるが、嘴を垂直に根本まで泥中に差し込み、上下に動かして採餌する動作もジシギ類に酷似していた。体の上面はアズキ色を帯びた灰色で、暗色の軸斑と淡色の羽縁とが明瞭であった。下面は白色で、脇腹と尾の先端に黒い横斑がある。嘴は黒色、足は緑黄色であった。飛翔時背までくい込んだ腰の白色部と翼の後縁の白線とが目立った。あまり鳴かず、主に飛び立ち際にピッピッピッピと鳴いた。警戒心はそれほど強くなく、こちらが動かずにいると、手の届きそうな近さまでやってくる。採餌場所はほぼ決まっており、舞い立っても、暫くするとまた元の場所へ戻ってきた。他のシギと行動を共にしたことはなく、常に単独行動であった。なお終認は10月31日である。

### 2. カラフトアオアシシギ

1979年9月1日、多摩川河口(川崎側)で日本野鳥の会千葉支部の熊谷章氏によって2羽のカラフトアオアシシギ (*Tringa guttifer*) が発見された。さらに数日後には4羽が同時に観察されたという。本種は、「絶滅のおそれのある鳥類」のリストにも入っている世界的に見ても数の少ないシギで、南サハリンでの繁殖が確認されているのみである(図-2)。県下へ飛来した記録は無く、初めての渡来であった。一度に4羽も渡来したことも珍ら

しいことである。なお、4羽のうち2羽は常に行動を共にしていたが、他の2羽はそれぞれ単独行動であった。

本種はアオアシシギに酷似するが、嘴の基部が太く肉色を呈し、足の黄色い点があオアシシギと異なる(但し、黄色い足のアオアシシギもいる)。羽色も良く似ているがより赤味が強く、顔も赤色がかって見えた。頸、足共に短く、体型はアオアシシギの縦長に対して、横長という印象を受けた。採餌動作はソリハシシギのそれとよく似ていた。活発に歩き回り、カニを見つけると素早く駆け寄って嘴を差し込み捕える。水中によく入るアオアシシギとは対照的に本種はあまり入らず、汀に添って移動し、採餌していた。警戒心はかなり強く人を近寄せない。飛翔時腰の白色が目立つ点はアオアシシギと同様であるが、鳴き声は全く相違し、ケッと聞こえる声であった(図-3)。

この干潟は満潮時には全く水中に没してしまい、シギの休む所は無くなってしまふ。干潮時に見られたシギ・チドリ類は潮が満ちてくると次々に舞い立ち、一部は川の上流へ、多くは海側へと飛去する。本種も海へ向かって飛去したが、これは羽田沖にある州に休息地を求めたことと思われた。なお終認は、筆者らの知る限りでは9月23日であった。

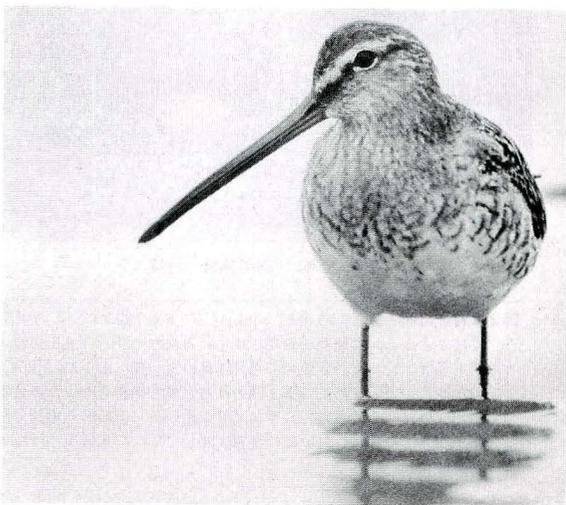


図1: オオハシシギ 横浜市大黒埠頭 1978. 10

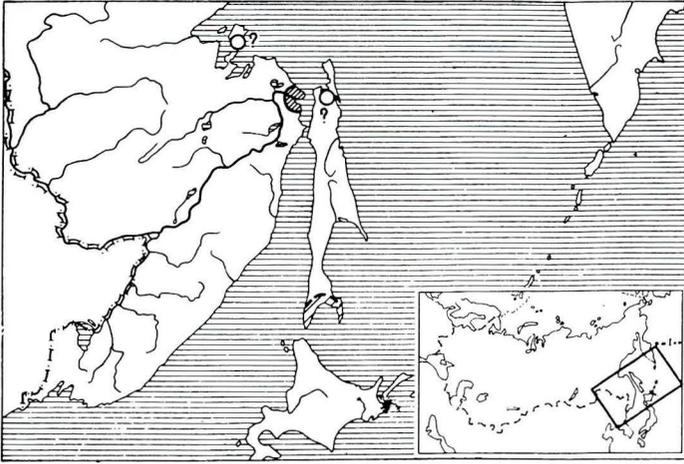


図2：カラフトアオアシギの繁殖地  
Flint et al., 1978より



図3：カラフトアオアシギ 川崎市大師 1979. 9

図2は最近出版されたRed data book of USSR (露文)からの引用である。これによると、繁殖期が確認されている南サハリン(黒田長禮, 1936カラフトアヲアシギの繁殖地の発見に就いて. 鳥, 43: 232-238)は過去の分布域として示されている(図のうち点線で斜線を囲った部分)。現在の分布域はウスリー地方のニコラエスクに近い所(図のうち実線で囲った部分)となっている。なお、この情報に関しては、小原敏氏のご協力を得た(編集部)。